ポイント・ライト・ウォーカー歩行方向の知覚に与える対人不安の効果

中村 浩

(北星学園大学短期大学部)

キーワード: 対人不安、ポイント・ライト・ウォーカー、歩行方向

The effect of social anxiety for perceiving the walking direction of point-light-walkers

Ko NAKAMURA

(Hokusei Gakuen University Junior College)

Key Words: social anxiety, point-light-walker, direction of walking

目 的

歩行者の歩行方向(自分に向かってくる歩行かあるいは自分から離れていく歩行か)が曖昧な場合、対人不安の強い人はパーソナルスペースも広く、他者の自分方向への接近に対する感受性が高くなるため、自分の方へ向かってくる歩行であると判断し易いことが予測される。そこで本研究では、ポイント・ライト・ウォーカーを刺激として用い、歩行方向が曖昧な場合の歩行方向の判断が、対人不安の高さによってどのように影響を受けるかについて検討した。

方 法

被験者 : 北星学園大学短期大学部女子学生 40 名

対人不安尺度 : 中村・高木(2012)の対人不安尺度の中から、人前で行動することへの緊張に関する質問 17 項目、基本的対人場面への不安に関する質問 12 項目、他者からの評価への不安に関する質問 13 項目、合計 42 の質問項目を用いた。

ポイント・ライト・ウォーカー刺激 : 身体的主要な関節(頭、両肩、両肘、両手首、腰、両膝、両足首の 12 か所)に目印を付けた二人のモデルにトレッドミル上を 3.0 km/h の速度で歩行してもらい、それを後方から録画したビデオ映像をもとに作成した。基本となるポイント・ライト・ウォーカー刺激は、トレッドミル上を向こう方向へ歩行するモデル 2 名の歩行動作である。まず、この基本刺激と動き全体を逆転した 2 条件を設定した。次に、歩行方向を曖昧にするために、上半身(頭から腰)の動きを逆転した条件と下半身(両膝と両足首)を逆転した 2 条件を加え、4 条件×2 名のモデル、合計 8 刺激を作成した。ただし、両手首の動きは、向こう方向への歩行を強く印象付けるため、すべての条件において、両手首ポイントを除いたものを用いた。

実験は被験者を 2 群に分けて集団で実施し、刺激は前方のスクリーン上にプロジェクタを用いて提示した。8 刺激の提示順序は、(1)モデル A 下半身逆転、(2)モデル B 基本刺激、(3)モデル B 逆転、(4)モデル A 基本刺激、(5)モデル B 下半身逆転、(6)モデル B 上半身逆転、(7)モデル A 上半身逆転、(8)モデル A 逆転であったが、同じ順序で再度提示し、全 16 試行において歩行方向(向こう方向か、手前方向か)の二者択一判断を求めた。なお各試行において、刺激は、全被験者の回答が終わるまで繰り返し提示した。

歩行方向判断実験の後、全被験者に対人不安尺度に対する回答を求めた。

結 果

対人不安尺度各質問項目に対して、その内容がどの程度自分に当てはまるかを、「よくあてはまる」から「まったくあてはまらない」まで 5 段階の回答を求め、それぞれ 4~0 点として得点化した。被験者ごとに各下位尺度の合計点を求め、それぞれの全被験者平均を算出した。その結果、人前で行動することへの緊張、基本的対人場面への不安、他者からの評価への不安の全被験者平均はそれぞれ 39.6(SD=17.6)、

18.5(SD=12.4)、27.1(SD=13.1)であった。そして、それぞれの平均点を基準に全被験者を高群と低群に分け、両群間の歩行方向判断について比較検討した。比較に際して、2 人のモデルと各刺激 2 回提示に対する歩行方向判断を一つにまとめ、基本刺激、その逆転、下半身逆転(足 R)、上半身逆転(上半身 R)の 4 刺激群に対する歩行方向判断と不安傾向との関連性について検討した。

Fig.1 は、三つの対人不安下位尺度合計点の高群および低群における歩行方向判断の割合を示したものである。基本刺激に対しては、高群・低群間

係なく、向こう方向へ歩いていると判断する割合が高く、逆に「逆転」条件ではどちらの群も手前に来ていると判断する割合が高いことがわかる。「足 R」条件においては、手前方向という判断が両群共に多いが、逆転条件に比べて、向こうへの歩行という判断の割合が高いことも理解される。「上半身 R」条件では、低群においてはほぼ基本刺激同様、向こう方向の判断の割合が高いが、高群では手前方向判断の割合が高いことが理解できる。

考 察

「足 R」条件では、全体的に手前判断が多くなっているが、これは足の動きが歩行方向判断に強く影響することを示すものと言えよう。それに対して「上半身 R」条件では、低不安群に比べて高不安群において手前判断が多い。この結果は、両群間で、歩行方向判断の手がかりとして注目する身体部位が異なることを示唆している。すなわち、低不安群の多くの被験者は足の動きを手がかりとしたために、基本条件とほぼ同じ判断の割合になっているが、それに対して高不安群では、上半身の動きを手がかりとする被験者が多く、そのために手前判断が多くなったものと考えられる。

このような、判断の手がかりとする身体部位が異なるという理由は考えられるものの、歩行方向が曖昧な場合、低不安群に比べて高不安群において手前判断が多く、仮説に一致して、高不安群の方が自分に向かってくる歩行動作に対して感受性が高いと言えよう。

引用文献

中村千尋・高木秀明 (2012). 青年期における対人不安・緊張の構造 —発達段階による変化に着目して— 横浜国立大学大学院教育学研究科教育相談・支援総合センター研究論集, 12, 33-52.